

## 合理的配慮の提供事例報告書【小学校】

### 事例の概要

A児は、B小学校の自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する小学校6年生である。自閉症スペクトラムおよび軽度知的障害を併せ有している。

A児は待つことや人に合わせることが苦手で、集団の中に入ることが難しい。疲れが溜まると感情のコントロールが出来なくなる。学習では、支援学級で15分程度は集中して課題に取り組める。また、交流学級の学習は、体育や図工等の実技のみ参加している。

A児への合理的配慮として、刺激を最小限にする環境調整を行うことや、安心して過ごすことのできる居場所作りをしている。学校生活の見通しをもたせるために、事前に学習や行事の活動内容やルール等を伝えることで、交流学級の学習にも参加できるようにしている。また常に介助員が寄り添い、受容的・肯定的な声かけをするように心掛けている。学習内容や学習集団等については保護者と合意形成を行い、随時、A児自身や関係教職員と話し合いながら指導や支援を進めている。

#### 1 対象児童の障害種

自閉症

知的障害

#### 2 障害の程度

非該当(知的障害)

※学校教育法施行令22条の3に該当か非該当か

#### 3 在籍状況

小学校・特別支援学級

#### 4 学年

小6

#### 5 対象児童の実態

A児は自閉症スペクトラムおよび軽度知的障害の診断を受けている小学6年生の児童である。待つことや人に合わせることが苦手で、集団の中に入ると、大変疲れるようだ。疲れが溜まると感情のコントロールが出来なくなり、イライラして物を投げたり、教室を飛び出したり、大きな声で叫んだりする。一旦やりたいと思うと自分を抑えることができない。失敗経験が多いために、自己肯定感が低く、人と接する時には被害者意識が強い。一度嫌だと思うと、敵意を表し遠ざけようとするところがある。

WISC-IVでは、FSIQ: 73 VCI: 80 PRI: 72 WMI: 68 PSI: 91といった結果が出ている。事務的な作業を素早く行う能力や物事を概念的に捉える力は持っているが、耳からの情報に注意を向け記憶することや思っていることを言語化することは苦手である。学習では、支援学級で国語・算数・社会・道徳を学習している。15分程度は集中して課題に取り組めるが、後は好きな工作等をしながら過ごしている。難しい課題であると、顔や首を引っ掻いてしまう。交流学級の学習への参加は、実技科目のみである。

こうした状態から、A児には常に介助員が寄り添い、学校生活を送っている。進路については、来年度、特別支援学校へ入学予定である。

#### 6 対象児童についての合意形成に至るまでの経緯

(1 誰からの申し出か 2 申し出の内容 3 連携、調整した関係機関 4 合意形成に至った結論)

A児の保護者とは、電話や面談等で連絡を取っており、個別の指導計画をもとに、学習内容や指導目標を共に立てている。合理的配慮の内容については、A児の学習目標と必要な支援について特別支援学級担任が提案し、保護者と確認している。

進学先を決めるに当たって、保護者は特別支援学校への進学が適切であると考えていたが、A児自身が中学校への進学を希望していたため、中学校での生活により近い形での支援を行ってほしいとの申し出があった。A児と相談の上、教科を決めて45分間授業に参加すること、介助員を付けずに過ごす時間を作ることを決めた。しかし、中学校との面談、特別支援学校の体験入学を経る中で、A児も特別支援学校への入学を希望するようになったため、再度落ち着いた生活を送ることを目標に、必要な支援を検討することとした。

## 7 基礎的環境整備の視点と概要

### 基礎⑤ 施設・設備の整備

特別支援学級は、多学年の児童が在籍しているため、交流学級との行き来がしやすいように本館2階に設置している。校舎の端に位置しているため、教室前の廊下は他の児童の行き来がなく、刺激が少ない環境で落ち着いて活動ができる。また、学習に集中できるように、教室前面の掲示物を減らすとともに、カーテンで目隠しをする。黒板の前の他に壁側に机を配置したり、パーテーションを用意したりして、個別に学習ができるようにしている。教室後方には円卓や畳を設置し、集まってのグループ学習や、児童の心の安定を図る場所にしている。

### 基礎⑥ 専門性のある教員、支援員等の人的配置

C市には、発達支援センターが設置されており、専門員が巡回指導および研修を行っている。また、大学教員等の専門家による巡回指導も行っており、より専門的な指導助言を受けることができる。C市の特別支援学級の担当者は、県教育委員会や発達支援センター等主催の研修に参加し、研鑽を積んでいる。B小学校には、複数の介助員が配置されている。

## 8 合理的配慮の観点と概要

### 合理①-1-1 学習上又は生活上の困難を改善・克服するための配慮

事前に活動や行事の大まかな流れやルールを伝えることで、トラブルを防ぐようにしている。また、注意をするときには、気持ちが落ち着いているときに伝えている。思っていることがあっても上手に伝えることができないため、道徳の時間にアサーショントレーニングを行い、自分の行動を振り返ったり、伝え方の練習を行ったりしている。

交流学級での学習は、参加する教科を本人と相談して決めている。また、各教科の担当と連携し、学習内容を事前に聞いて実技を中心に交流できるように配慮している。自己肯定感の低いA児が活動に参加できるように、リコーダーやダンスなどの練習を支援学級で行い、自信を付けさせている。

支援学級で行う個別学習では、学習内容や流れを視覚的に示し、見通しを立てやすくしている。集中が持続しないため、活動を区切り、15分程度で学習が終わるように量を調節したりしている。算数では、計算については計算機を使い、生活する上で必要なお金の計算等の処理の仕方を身につけられるようにしている。

### 合理①-2-3 心理面・健康面の配慮

介助員と連携し、ストレス等の状態を踏まえ、活動内容を調整している。交流学級で過ごした後には、友だちがしてくれた良いことやその意図を言語化して伝えたり、小さなことでもA児が頑張ったことを褒めるようにしている。疲れが溜まり気持ちが高ぶっているときには、落ち着くまで一人で静かに過ごせるように配慮し、遠くから見守り、落ち着いてから関わるようにしている。支援学級で過ごす時間が長いため、円卓及びロッカーの一角を、A児の個人スペースとして使用している。ロッカーには廃材や布等を常時おいて、いつでも工作や裁縫ができるようにしている。本児のリラックスタイムに他の児童が学習している時には、パーテーションで仕切り、落ち着いて過ごせるようにする。他学年の児童と同じ時間に学習を行う際には、先にA児と個別に関わる時間を設定している。

## 9 成果と課題

A児が自分の持っている能力を発揮し、更に高めていくためには、心理的な安定を図り、自己肯定感を高めたり、衝動性をコントロールしたりする経験を積みながら、可能な限り学習に取り組んだり、交流学級の児童との関わりを広げていったりすることが必要であると考えている。介助員が受容的に関わり支援することで、そのときの心理状態や状況などを把握することができた。また、複数の目で見ることにより適切に行動を解釈し、対応を考えることができた。また、失敗経験をしたとしても、肯定的な声かけをすることで、再度挑戦する姿が見られるようになってきた。A児自身も、頑張りたいとの思いを持っているため、A児の気持ちを尊重しながら、更に友だちと関わっていけるよう支援していきたい。また、A児は今年度卒業するため、来年度入学する特別支援学校への引き継ぎを丁寧に行っていきたい。

特別支援学級担任のみでなく、交流学級の担任、介助員はもちろん、学校全体として特別支援に対する知識を高め、より一層教職員同士が連携した支援を充実させることが課題である。